

論文

描画テストにおける「あそび」の要素

—星と波テストへの一考察—

稲田 雅美

学芸学部・音楽学科

1. はじめに

星と波テスト (Der Sterne-Wellen-Test : SWT) は、描画による心理テストのひとつである。投影法の性格をもつこのテストは、開発後の歴史がまだ浅いため、世界的に見ても、事例報告もテスト自体の有用性に関する研究も他の描画法に比べて格段に数少ない。しかしそれだけに、対象者の反応傾向を分析することや作品の読み取り方を議論することは、発達検査や心理療法のツールとしての可能性を広げる上で重要であると思われる。

本研究は、星と波テストの独自性であるところの自由度の高さ、すなわち、被験者に要求される描写要素の簡潔さとそれともなう自由な表現の容認、に焦点を当て、とくに、制限からの逸脱という意味でのあそび的表現について考察するものである。この考察は、星と波テストが臨床場面に浸透していくにあたって、その解釈の仕方に小さな貢献をするものと考えられる。

2. 星と波テストの概要

星と波テスト (以下、SWTと略記する) は、1970年代にドイツの心理学者であり筆跡学者であるウルスラ・アヴェ＝ラルマンによって創案・開発された。アヴェ＝ラルマン自身が述べるところによると、SWTは、筆跡学による解読法を補足し応用するために構想したもので、もともとは幼少期の子どもたちへの適用を念頭においたものであった (Ave-Lallement, 1979)。SWTは、かたち、運動、空間配置といった筆跡学的診断の中心要素をもつことから、表現学や性格学と結びつく。しかしまた SWTは、星と波の様相が無意識のテーマや葛藤を表現しようという意味で、深層心理学的でもある。このようなことから、SWTは現在、幼児の発達機能検査として活用されているほか、児童期から成人期、高齢期にいたるまでの広い年齢層を対象とする人格検査として応用されている。後者の場合には、作成され

た描画を前にして、質問や会話をおこなうことが一般的である。これは、心理カウンセリングとしての一側面ともなり、描画にあらわれる投影や象徴表現をとおして被験者の内面を推し測ることが可能となる。

SWTは、A5サイズのテスト用紙に印刷されている長方形の枠のなかに、星と波の絵を描くように指示することのみで実施される (テスト用紙は「日本語版 SWT」として著作権保有されている)。標準的な教示方法は、「鉛筆で、海の波の上に星空を描いてください」であるが、対象者の年齢や理解度に応じて別の表現、たとえば、「波のある海とお星さまの出ている空を描いてみましょう」といった教示表現の工夫をしてもよいことになっている。時間の制限はないが、概ね5分から10分程度の所要時間とされる。星と波以外のものを描いてもよいかという質問に対しては、本来のテーマである星と波のみに気持ちを向けるよう促すが、自発的に描いてしまったものについては、そのときの被験者の気分を大切にす。

このように、SWTは、基本的には描かれた星と波という2つの要素が、発達診断の有効な手がかり、もしくは心理療法における対話の糸口となる。しかし、実施に際しての教示方法から推測できるように、実際には星と波以外の要素が自発的に描かれるのは決してまれではない。むしろ、それらの付加的な要素のほうが象徴的価値として高い場合すらある。教示を超えた反応を肯定するという態度は、他の描画法には見られない独自の特徴である。教示からの逸脱は、他の描画テストにおいては、誤った行為や理解の低さとしてマイナス要因に挙げられることが多いが、SWTには逸脱についての暖かなまなざしがある。結果的には何を描いてもよいし、描かれたものを否定されることもない。SWTの被験者は、教示を超えることを潜在的に期待されているといっても過言ではない。本稿では、この逸脱を SWTにおけるあそびと仮定し、あそびの要素はどのようなかたちとしてあらわれるか、またそれは、被験者にとって何を意味するかについて考察する。さらに、星と波のみで描かれている教示順応型の作品にもあそびは多様に存在することを論じる。また SWTは、そのあそびを誘うユニークな

特徴によって、人間の内的世界を投影するツールとなることを、いくつかの事例を挿入しつつ確かめてみたい。

3. SWT の分析基準

SWTとあそびの関連について論じる前に、SWTの解釈のための一般的な分析基準をふまえておきたい。あそびの要素は、つねに分析基準のどこかに位置づけられ、場合によってはいくつかの基準にまたがって生まれる。分析基準は、あそび的要素の様相を吟味するのに役立つとともに、被験者の全般的特性や文化的習慣などを理解、または予測することに必要なものでもある。

SWTの分析は、絵の様式、空間構造、空間象徴、描線の種類、物の象徴、の各側面からなされる。以下は、それぞれの側面における分析基準とその説明である。

〔絵の様式〕 分析においては、まず絵にあらわれるスタイルが注目される。絵の様式は、被験者の全般的なパーソナリティを反映する。様式の解釈は、要点のみのパターン、絵画的なパターン、感情のこもったパターン、形式的なパターン、象徴的なパターン、の5つの区分によっておこなわれる。

アヴェ＝ラルマン (Ave-Lallement, 1979) の見解に基づいて各パターンの特徴をまとめると、まず要点のみのパターンでは、描き手は、星と波の形状を冷静に想起し、概念的にそれらを確認していると考えられる。海の上に広がる星空を生き生きと体験している印象ではない。絵画的なパターンは、星と波を盛り込んだ体験的な物語をひとつの枠のなかで表現しようとする意図があり、装飾的な要素や、星と波以外の付加物が書き加えられることが多い。感情のこもったパターンは、体験の回想、感情の強調といったいわば夢のような体験が入り込んでいる点で、絵画的なパターンと区別される。形式的なパターンは、装飾的な表現形式が優勢で、しばしば心理的内容を包み隠すことがある。象徴的なパターンは、描画のなかに明確に、あるいは暗示的に象徴的示唆を含んでいるもので、これらは描き手の生活状況の文脈において解釈されるべきものである。以上の5つの区分は、あくまで解釈上便宜的なものであって、相互排他的な特徴を有しているわけではない。象徴的なパターンが感情のこもったパターンもしくは絵画的なパターンでもあり得るし、要点のみのパターンのなかに絵画的パターンの要素が見られることもある。

〔空間構造と空間象徴〕 空間構造に関する分析基準は、筆跡学からの借用により4つに区分されている。それらは、

自然の調和、並置、規則性、不調和である。自然の調和は、自然のなかの有機的なつながりに見られる本物の調和である。しかしそれは自然の模写ではなく、描き手の中心にある、心の平衡をあらわすものである。比率における形の調和とは対極的である。並置は、形の調和、あるいは配列原理といった外的な秩序にもとづくバランスのとれた形態である。そこには順応や適応に対する描き手の意志があり、無意識の努力を感じさせる。規則性は、諸要素が計測されたような等間隔で置かれているような描画の特徴であり、作為的な印象を受ける。規範への意志や自己管理に基づいているため、自己の感情やこころのあり方が反映されにくい。不調和は、要素間の釣り合いが不足しているということである。自然な調和、並置、規則性のいずれも見られないものの、一面的にマイナスの解釈を与えることはできない。不調和は、身体的、知的な未成熟に基づく、あるいは、一時的な心のアンバランスによって生じる反応である一方、調和を故意に拒絶した表現であったり、秩序に対するある種の抵抗といった、より高度な表現形態である場合も考えられるからである。

空間象徴に関しては、SWTにおける評価には、絵の垂直的構造、水平的構造、絵の中央に注目して、各空間域の広がり、それぞれの領域における描画内容の強調をもとに解釈する。空間象徴は、各空間域のいずれかにおいて極端に粗密がある傾向が見られる場合には、あそび的要素とのかかわりも考慮に入れるべきであろう。しかし、空間象徴を解釈するには、視覚芸術の古典作品を解釈する目を養うことを出発点に、無意識の願望や葛藤についての考察が不可欠であるため、本稿では空間象徴を議論に加えることは控える。

〔描線の種類〕 SWTは、描かれた要素のかたちやそれらの空間配置によって解釈されるだけでなく、描線の特徴を分析することによって解釈に厚みを加える。描線の特徴のみを取り出すことは直接的にはあそびの要素としてはなじまない。描線分析は本来、病理や障害の診断の手がかりとして実施されるものだからである。それでもなお、描線の吟味は、描画時の情緒状態や集中度を推察できる意味であそびと関連する可能性はあるので、描線分析の項目を整理しておきたい。

SWTの描線は、線の運び、線の性格、線の障害、平面の処理、という4つの区分によって分析される。描線の運びは、一本線、動きのあるタッチ、安定している、不安定である、連続している、寸断している、の6つの視点から検討される。線の性格は、繊細(弱圧で肉細)、やわらかい

(弱圧で肉太), 鋭い (強圧で肉細), しっかりした (強圧で肉太) の4種類に整理される。また線の障害 (または障害の兆候) としては, か細い, もろい, 硬い, 乱雑な, バラバラになった, 黒く塗りつぶした, という6つの性格が示されている。平面の処理については, 影をつける, 毛羽立てる, 輪郭を描く, 暗くする, 荒くする, の5つに分類されている。

以上が描線の諸相の構成であるが, これらもまた解釈のための便宜上の区分にすぎない。描かれた要素のかたちや配置とともに描画の全体的印象を大切に受けとることは, 他のすべての描画法にも共通した姿勢であり, その姿勢こそが被験者の人格を大切にすることでもある。

〔物の象徴〕 物の象徴とは, 描かれるものの多様性とその象徴的な意味についての吟味である。星は無知の暗闇のなかを導き進んでいく意識の光を象徴し, 水 (波) は命の源として産み出す力を象徴する (リーネル他, 2000)。星と波の象徴によるだけでも多彩な解釈が成り立つであろうが, 前述のように, SWTは, 星と波を描くという教示のなかに, 星と波以外の「もの」を描くことを公然と暗示している。したがって, 象徴については, 何が描かれているか, それがどのような大きさで, どのような配置になっているかなど, 多角的に検討する必要がある。ときによっては「もの」と「もの」の組み合わせから, 象徴されている「こと」を推測しなければならないだろう。そのような複雑さはあるにしても, 星と波以外の付加的な要素から描き手の発達機能レベルや人格の様相を推し測ることは, SWTの特徴として傑出したものである。基本的教示から離れた反応のなかに見え隠れする描き手のところを探ることは, 人間がもつ本来のあそびごころについての示唆を与える。

象徴についての議論は, 「もの」それ自体からだけでは不可能であり, いま述べたように, 大きさ, 空間配置, 「もの」同士の組み合わせによって象徴の意味が変わるのみならず, 描き手個人の経験, 文化, 生活文脈なども考慮に入れなければならない。したがって, ここでは, 象徴されるものについての考察は加えず, 描かれた付加的な要素について分類するのみにとどめる。筆者のもつサンプル (のちに詳述) をもとに整理すると, a) 景色に関する自然物: 月, 太陽, 雲, 稲妻, 砂浜, 岩, 島, 木, b) 海の生物: 魚, タコ, イカ, 貝, 貝殻, c) 人間や小動物: サーファー, 子ども, 鳥, 犬, d) 人工物: 船, 飛行機, 灯台, 望遠鏡, 旗, となる。

4. 逸脱の諸相

そもそも被験者がSWTの基本的教示から外れようとする契機はどこにあるのだろうか。まず, SWT以外の描画法のいくつかと比較することによって, 答えの可能性を探ってみたい。

第一に, SWTの空間の枠が何らかの心理作用を及ぼしているということである。たとえば, バウムテスト (Der Baumtest) はA4サイズの用紙に描き出されるのに対して, SWTで与えられるのは, A5サイズの内側にさらに枠づけされた, 小さな空間 (およそ150mm×105mm) である。枠の大きさについていえば, SWTと併用されることの多いワルテッグ描画テスト (Der Wartegg-Zeichentest) はA5用紙のなかに8つの枠 (横4段×縦2段) が設けられている (Ave-Lallement, 1994)。ただし, その各枠内にそれぞれ異なった刺激図 (描き手に続きを描くよう促す点や線) が与えられているため, 枠空間には独特の制限が備わっている。したがって, 自由空間という意味では, 標準化されている描画テストのなかでSWTが提示する面積は最小である。このSWTの, 枠つきの小さな自由さが描き手にあそびの契機を与える。それはウニコット (Winnicott, 1971) の「抱える環境 holding environment」ともいべきものであり, 安全感, 状況持続感のなかで, 自己解放の動機づけがおこなわれるのである。

第二に, SWTにおいて描かれる要素のシンプルさである。DAM検査 (Draw-A-Man Test), HTPテスト (The House-Tree-Person Technique) などに見られるように, 要求される描写要素が複雑であったり数が多かったりすると, 要求の達成のためにほとんどのエネルギーが注がれる。一方SWTは, かたち, 描線, 空間構造において, 描き手がテストの要求に応えるのは困難ではない。すなわち作品完成の要件を充たすためのエネルギーはきわめて少なく済む。その余剰エネルギーが, 付加的な身体運動 (描く行為) や創造的アイデアを誘発すると考えられる。しかしまた反対の見方もできる。それは, この描写要素のシンプルさゆえに, 描く絵がどこまでも未完成であるという印象を描き手に残し, そのことが, 星と波の大きさや配置に多様性をもたせたり, 別の要素を書き加えるなどのアイデアを生み出すのだとも考えられる。星と波は, 子どもにとっての積み木やゴムボールのごとく, シンプルで堅牢で非充足的な遊具となるのである。

第三に, 星と波から連想される個人的なイメージとの関連である。木や人物は生活に密着した光景であるのに対し

て、星と波はある種の感慨を伴った情景である。もちろん、星も波も状況によっては日常的な風景であるかもしれない。しかしながら、規模が壮大で宇宙的なつながりを感じさせること、光と水といった生命にかかわる根源的要素であること、神話や芸術などと親和性をもつことなどにより、星と波は描き手が自らとの内的な対話を通じて行き来する現実世界と空想世界の媒体物、もしくは、外的世界と内的世界の橋渡しをするウィニコット (Winnicott, 1971) の「移行対象 transitional object」となる。この第三の点については、かならずしも付加物を生む契機とはならないが、次節であそびの概念を広げる基盤となるものである。

理論的考察を進める前に、逸脱としての付加物のあらわれ方について、実際のテスト結果をとおして見ておきたい。以下に呈示する例は、大学生の SWT における一般的描画傾向を見るために、筆者が2002年に当テストを集団状況でパイロットテスト的に実施したときの作品から選んだものである。被験者の合計は161名で、全員が20代前半の女性である。テスト時の状況を補足すると、個々の被験者のパーソナリティを推測することを目的としたテストではないために、実施後の対面的な言語交流はとくにしていない。ただし、このような交流に代わるものとして、SWT 用紙の配布と同時に、被験者全員に別の A 5 用紙 (白紙) を渡し、自分が描いた絵についての感想や、絵から連想される音や音楽について自由記述をしてもらった。

例1 (図1参照) : 付加物としての船が、優しい表情で鑑賞者のほうに向いている印象を受ける。星が一つ、船の上に乗っている様子もユーモラスで、星にも命が吹き込まれているようだ。また、船の存在は、星と波のリズムをつなぐ、両者の共有財産のようである。この作品の描き手は、筆記コメントとして、この絵を見た友人に海が荒れていると言われたが、荒れていない、穏やかだと返答したと記述

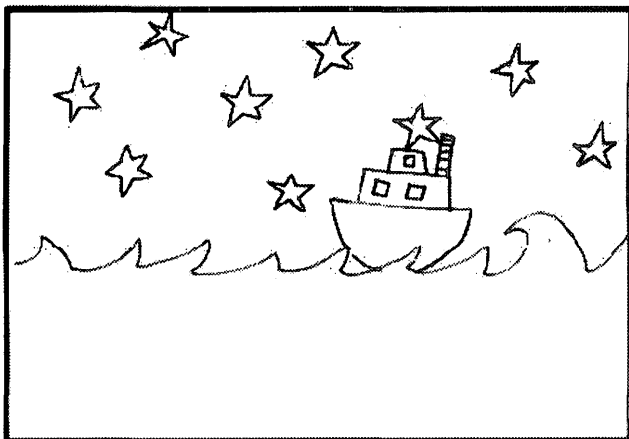


図1

している。また、船はゆっくり走っているとも書いている。安定した船の存在は、描き手の空想の収束点であり、描き手の情緒の安定度や周囲の状況との調和能力の高さが推測できる。

例2 (図2参照) : 付加物である月が明らかに擬人化している。分析基準としては絵画的パターンであり、一枚の絵がストーリーになっている感じである。月が、星たちのグループに向きあって会話をしており、波がその会話を支えている。波は会話の聴衆のようにも見える。描き手はおそらく、月と星の会話を想像しながら、月の表情に手を加えたり、小さな星の数を増やしたりしたのであろう。自己の内的対話の活発さがうかがえる。

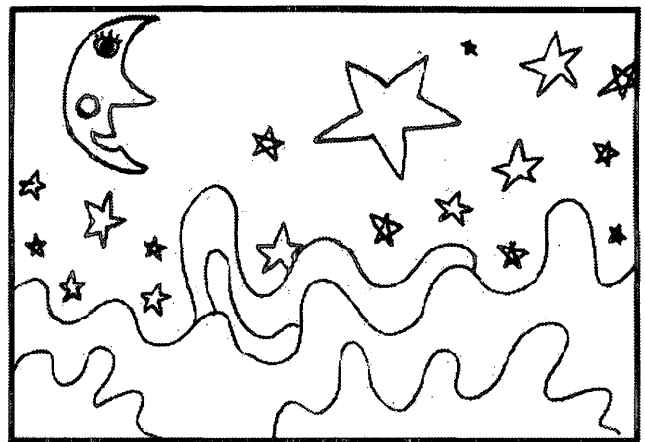


図2

5. SWT におけるあそびの理論的考察

SWT における教示からの逸脱はなぜあそびといえるのか、あるいは、規則から逸脱することは逃れながらもあそびごころに満ちた作品としてわれわれに印象づけられる要件はどのようなものか、また、あそびというものが描き手にとってどのような意味をもつのか。これらの点について順次考察したい。

まず、規則を一種の儀式としてとらえることによって、決まりを遵守する神聖さという点からあそびを考えてみる。アンリオ (Henriot, 1973) はつぎのように述べている。

儀礼が執行される際、祭式執行者は自己の役割に密着し、決して少しでも後退することがないから、自己の行為からほんのわずかでも離脱する機会や、自身の現にしていることをしつつある自己を眺めたり、自身のしていることの意味や価値について自問するような機会をもつことなどありえないのだ。その意味やその価値が問いただされることはありえないと

見てよい。行為者（役者）は自身の行為と一体化している。（邦訳文献 p.158-159）

規則から外れるということは、営まれる一連の儀式において、その与えられた役割に徹して一体化することから生じる自己消失に対する抵抗であると考えられる。つまり、自己を見つめる別の自己を生き残らせるための選択なのである。SWTの指示から逸脱することは、儀式という秩序の世界と、儀式を離脱することからひらかれる無秩序の世界との対立のなかに身を投じることとなる。アンリオは、あそびの実現において、騒ぎ（パイディア paidia）と規則（ルドゥス ludus）という二つの矛盾した構成要素が対立し、干渉するという。すなわち、あそびというものは、騒ぎと規則のあいだ、無秩序と秩序のあいだ、喧騒と方法のあいだで成立する。ここにおいて、SWTにおける規則からの逸脱をあそびとした仮定は確定される。しかし、あそびというものは、あそぶ人に対してのみ意味をもつのであり、何のあそびをしてあそんでいるかという観察によって特定できるものではない。アンリオは、「肝心なのは、〈もの〉として構造としての遊びではなく、〈こと〉として意味としての遊び」であり、「遊びの実在性はただ人間のなかにのみある」（同上、p.80）と述べている。

観察によっては見きわめることのできない、人間のなかにのみある実在性としてのあそびは、あそぶ人のなかで何を生み出しているのだろうか。それは、自我における「わたし je, I」と「自分 moi, me」の二面性を経験しながら、自己との対話を潜行させていると考えることができる。

フランス語も英語も、主語によって動詞の活用が変化する。「わたし」、すなわち「je」や「I」は、自身のなかにある主語の機能であり、自身の行ないを表現するすべての動詞の主人公である。ミード（Mead, 1934）は、「I」とは、自身の経験のなかにあらわれる共同体の態度に対するその個人の反応であり、「me」とは、個人が「I」として反応していく対象としての一群の組織化された態度であるとしている。つまり、自分自身の行為に影響していると人が想定している他者の態度が「me」、すなわち「自分」を構成するという。ミードはまた、「I」は、行動したのちにはじめて自分が何をしたかを知る記憶の形をとって経験のなかにあらわれるものであって、私がしようとしていることを私は知らない、つまり、「I」の歩みは未来への運動であると述べる。私たちが社会的になんらかの働きかけをする際、「わたし」の行動は、「自分」が要求するところと同一のものとして重なることはない。両者にはたえず何らかのずれ

がある。しかしこの「わたし」と「自分」の識別が人格を形成し、特徴づける。自我における「わたし」と「自分」の弁証法によって、経験に新しいものが加わり、自覚が更新されるからである。ミードは、自我に「I」と「me」の側面があることは、ゲームへの参入の前提になるとし、アンリオは、あそぶことのできる存在として指定される存在は、自己自身の今あるがままの存在に対してみずから距離を設定することができなければならないと述べる。あそぶ人は、「わたし」と「自分」の接近と離反のダイナミクスにおいてつねに覚醒しているのであって、非現実的、空想的な世界に没頭しているのではない。あそびというものは、対象としての自己が内在化されてはじめて成立するものである。

このように、あそびを個人内の内的な語らいと捉えると、SWTにおいて、あそびの意味が拡大される。つまり、星と波以外の付加物を使用するほかに、描くことの行為そのもののなかにあそびの要素が包含されるのである。描き手のところが自由に動いている、そしてその動きが鑑賞者にまで影響を及ぼしていると考えられる作品は、内的対話のなかで描かれたものであるといえよう。あそんでいると推測される作品には健全な社会的態度が含まれているゆえに、鑑賞者の共感を呼ぶものとなるのである。すでに見た例1および例2の作品は、このような社会的態度が明らかに存在するが、以下ではさらに、付加物を伴わない、つまり星と波のみの作品におけるあそびの要素について検討してみよう。

例3（図3参照）：自然の光景ではなく、星と波をモチーフにしたデザインであり、分析基準においては形式的なパターンの典型である。要素の大きさと配置のバランスがとれており、流れの方向性も一貫して躍動感を与える。描き手は自分の作品を見る他者を想定し、その人との対話

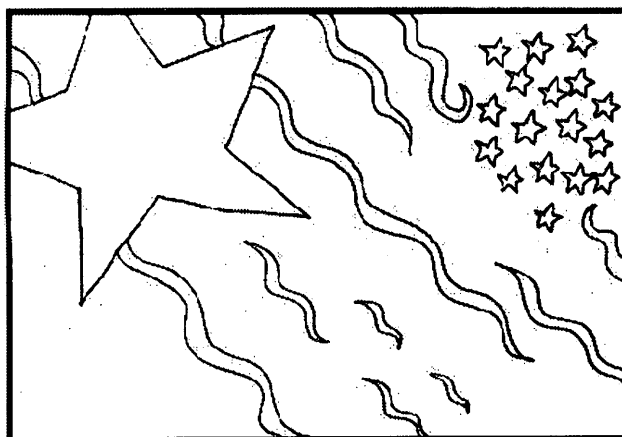


図3

をすでに開始しているようである。装飾的な表現様式によって自己を顕示し、情緒の共有を願望していると考えられる。

例4 (図4参照)：分析基準に照らすと、空間構造における自然の調和の項目に属する。リズムを刻みながら空間を横切る波の線と、大小の星の集合とのバランスが、描き手の心の平衡を投影しているようである。波の小さな跳ねはあとから加えられたものだろう。動きのある絵にするための工夫としての加筆は、他者を意識し、外にひらかれた自分であることをあらわすための、まさにあそびごころと呼べるアクションである。

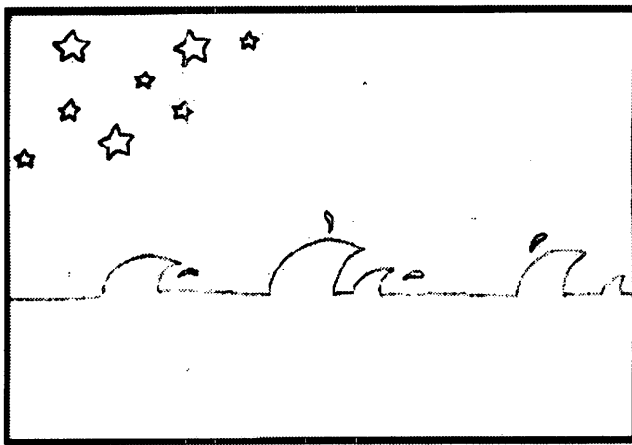


図4

例5 (図5参照)：構造的に二つの基盤が見られる。ひとつは、分析基準における並置であり、星と波を、自然の配列原理にもとづいて位置させていること、もうひとつは、一般の分析基準には見られないところの奥行き関係である。絵の上半分は、星が前景、波が背景となる図と地を構成していると見ることができる。その二つの基盤は波のうねりによって連続的につながっている。これは、並置を生み出す意識的で現実的な自己と、広大な空間のなかで自分の居

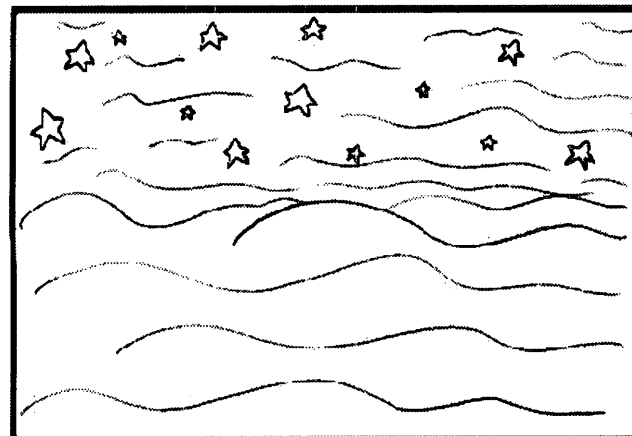


図5

場所を特定するための試行錯誤を楽しむ空想的な自己とがせめぎあっているように思われる。描き手は、静かな夜の海の雄大さをあらわすために空間全体を使って海を描いた、とコメントに記している。広大な空間に呑みこまれない確固とした自己を多数の星に投影し、自己のあるべき姿を見出しつつあるかのようなのである。

例6 (図6参照)：水平線が繊細にグラデーションを成しており、月や波のやわらかな線とともに時間をかけて描かれた様子である。丁寧に描いているうちに作品への愛着が生まれ、自己の内に対話をしながら穏やかな情緒が湧出しはじめているかのようなのである。付加物としての月は、空間のバランスを安定させるために重要な要素となっているが、例2の月のように自己主張的ではなく、静かで控えめな存在である。描き手のつぎのような筆記コメントからも、自己内の豊かな対話の様子がうかがえる。「波の音がきこえる。小さな白波を立てて、浜に波が絶えずおしよせます。水平線の方は色が濃いけれど、月あかりに照らされてほんやり光っています。きっと明日もいい天気です。」

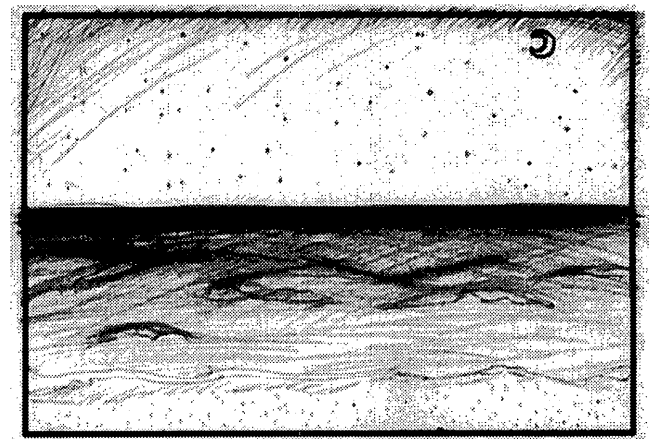


図6

6. まとめ：SWTにおけるあそびの内実

ウィニコット (Winnicott, 1965) は、子どもが「抱える環境」としての母親を内在化したときに一人であそべるようになる、すなわち、一人でいながら二人、二人でいながら一人、の状況が可能になると述べている。この「一人でいられる能力 capacity to be alone」は、じゅうぶんに成長した個人のなかでは、内在化している他者、もしくは「自分 me」との対話を果たしながら、自己反省へと向かう能力となって保持されているといえよう。

SWTにおいて、付加物を描くことは、再度アンリオの言及を借りれば、「行為がだれか別の人に無媒介的に理解され

うる、という確信が成立している」(Henriot, 1973 邦訳文献, p.132) と見なすことができる。付加物の登場は、人間同士としての同質性をもつ他者を想定する、自分のなかにいる他者を呼び出す、もしくは「自分 me」の構成を確定するという点において、一人であそべる状況が整っていることをあらわしている。また、付加物に頼らない場合も、内在化した他者との絶え間ない交流のなかで、その他者から認知を受けている自分を見つめ、意志し、判断している。すなわち、これらすべての「一人あそび」は、自分の意味や価値を自らに問う契機となっているのである。SWT は、他者の内在化を基盤とした自我の健全さを推測するツールとしての可能性を秘めていると結論づけることができよう。

(付記)

1) SWTの実施に際して、本学現代社会学部社会システム学科2000年度生と学芸学部音楽学科1999年度生および2000年度生にご協力いただいた。今は卒業生となられた諸姉に心より感謝いたします。

2) 本論文は、同志社女子大学総合文化研究所2002年度個人研究助成金により執筆したものである。

引用・参考文献

- Ave-Lallement, U. (1979) Der Sterne-Wellen-Test. München/Basel: Ernst Reinhardt Verlag. 小野瑠美子訳『星と波テスト：発達機能・パーソナリティの早期診断』川島書店 2003
- Ave-Lallement, U. (1994) Der Wartegg-Zeichentest in der Lebensberatung. München/Basel: Ernst Reinhardt Verlag. 高辻玲子・杉浦まそみ子・渡邊祥子訳『ワルテッグ描画テスト：心理相談のための』川島書店 2002
- Caillois, R. (1967) Les jeux et les homes: le masque et le vertige. Paris: Gallimard. 多田道太郎・塚崎幹夫訳『遊びと人間』講談社 1990
- Davis, M., Wallbridge, D. (1981) Boundary and space: an introduction to the work of D.W. Winnicott. London: Karnac Books. 猪股丈二監訳『情緒発達の境界と空間：ウイニコット理論入門』星和書店 1984
- Henriot, J. (1973) Le jeu. Prsses Universitaires de France. 佐藤信夫訳『遊び：遊ぶ主体の現象学へ』白水社 2000
- Leibowitz, M. (1999) Interpreting projective drawings; a self psychological approach. Brunner/Mazel Inc. 菊地道子・溝口純二訳『投射描画法の解釈』誠信書房 2002
- Mead, G. H. (1934) Mind, self and society: from the standpoint of a social behaviorist. University of Chicago Press. 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』青木書店 1973
- 小野瑠美子, 黒田正典 (2003) 「星と波テストの理論的背景とそのテストバッテリー：クラークスの〈精神対生命〉の概念にもとづく接近」『日本福祉教育専門学校研究紀要』11 (1), 39-45.
- リーネル, B, 杉浦京子, 鈴木康明 (2000) 『星と波テスト入門』川島書店
- 上里一郎監修 (1993) 『心理アセスメントハンドブック 第2版』西村書店
- Winnicott, D.W. (1965) The maturational processes and the facilitating environment. London: Hogarth Press. 牛島定信訳『情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社 1977
- Winnicott, D.W. (1971) Playing and reality. London: Tavistock Publications Ltd. 橋本雅雄訳『遊ぶことと現実』岩崎学術出版社 1979